
深層心理パラディソ

オンドヒツギ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深層心理パラディン

【著者名】

ZZマーク

【作者名】

オンドラヒツギ

【あらすじ】

私は思い出を清算しないといけなかつた。だけど、私はその思い出から逃げることを選んだ。でも、それももう限界だつた。あの三本脚の鶏はいつでも私の側にいて、いつでも私をあの思い出に引き込もうとする。だから、思い出に溺れる前に、思い出に狂つてしまふ前に、私は過去を償わないといけない。その為には私はママの田舎に帰る必要があつた。あの黒い森があるママの田舎に……。

一 日目（遊星天）

ママの田舎へ帰ったとき、私はある森へ迷い込んだ。
どうしてその森に這入ったのかは良く覚えていない。

覚えているのは、まるで夜空をそのまま切り抜いて貼り付けたような黒い森と、宇宙に散りばめられた惑星みたいに発光し森を漂う昆虫たち。

その不気味な森に私の肉体は捉えられ、

その不思議な昆虫たちに私の心は捕らえられた。

私は歩くことさえままならずその場に座り込んで泣きじゃくるのがせいぜいだった。

森には私の泣き声しか響いていなかつた。

鳥の囀りも獣の遠吠えも、私の耳には届かない。

まるでこの森には、私と昆虫たち以外には生物はないのではないか？ 今ではそう思つくりに、あの黒い森はあまりにも無機質だったのだ。

ときどき、私には空を見上げてしまう癖がある。勿論、あの黒い森で体験したことが起因となつてるのは明らかだった。
空を見上げた私の視線の先にあるのは、

青い空と白い太陽、

そして、

太陽から零れ落ちたかのような生命を持った黒点。

意思を内包した猛禽の眼、

空中で停滞する美しくもグロテスクな黒い翼、

神聖と邪悪さを兼ね備えた発光するシリエット、
狂氣を象徴したかのような三本脚の奇形。

そうだ、

あれは、

私が見るあの鴉は、

私が迷い込んだあの黒い森の具現化された姿なのだ。

「なにをしているの?」

私の頬を影が横断する。影は停滞したままで私を空から隔絶していた。

「思い出を見ていたの」影の主、私はツクヨミの眼に焦点を合わせて彼女に応える。

「思い出?」首を傾げてから、ツクヨミは後ろを振り向く。「空しか見えないけど?」

「そこに私の思い出が浮かんでいるのよ

「雲みたいに?」振り返つてツクヨミは微笑んだ。「随分口マンチツクじゃない? それともセンチメンタル?」

「そんな高尚なものじゃないわ。厭な……、思い出よ

ツクヨミは首を竦めただけで、あとはなにも言わなかつた。私と同じようて芝生へ寝転んで空を眺める。必要以上に立ち入らないのは彼女の良いところである。それだからこそ彼女と長く付き合つていられるのだろう。空をぼんやり眺めながら、私は彼女をそんなふうに評価する。

鴉はいつのまにか消えていた。

いや、その場からいなくなつただけだ。

鴉の視線が皮膚を通して伝わつてくるのが、私にはわかる。視線だけを使って私は鴉を探した。

鴉は……、いた。

身体を枝に三本脚で固定させて、私を見下ろしていた。

鴉と眼が合つ。

どこかで見たような瞳だ。

だけど、どこで見たかは良くわからない。

ふと、頭痛が私を襲つた。

それから、ノイズ。

思わず瞼を押さえる。

「どうしたの？ 大丈夫？」 横からシク声の声。
私は「大丈夫よ」と彼女に応える。

まだ迷っている？

また、声。だけどシク声ではない。

男の子の声だった。

迷っている？ 私が？

そう君は迷っている。

ああ……、君はまだ迷っているんだね。

今でも君はあの黒い森を彷徨っている。

でも、僕にはもう君を導く力は残されていないんだ。

あとは、君が自分の力で黒い森を抜け出さないといけない。

君は、君のトラウマを、君の力だけで克服しないといけない。

ベッドの上で君を眺めていたように……、

ただ、僕は君を見守ることしかできない。

泣いている君を連れ出したみたいに……、

もう僕には君の手を引くことはできない。

駄目！ あの子の傍に居りや駄目よ！

ママ……、どうしてそんなことを言つの？

あの子は不吉だわ……、早くいなくなれば良いのに。

ママ……、どうしてそんな酷いことを言つの？

見ちゃ駄目っ！ あなたまでおかしくなっちゃうわ！ そんな

ことになつたら、私……、私。

ママ、ママ、どうして、どうして、そんな酷いことばかり言える

の？

ねえ、ママ。

ママお願いだから教えてよ。

ねえ……、

「どうしていつも黙つてるのよー？」 ヒカルの口になつたら、マ

「マはいつもいつも！！」

「ちょっ！ 大丈夫、スクナ！？」

「ねえ、スクナ。

頼みがあるんだ。

そこにあるプラグを抜いてくれないかな？
重くて、しかたがないんだ。

「ねえ……、

「スクナ……、

「スクナ！ 大丈夫なの？ スクナ！？」

「スクナ！！ お前はとんでもないことをつ！」

その声を聞いた瞬間、私の頬に鋭い痛みが走る。

思わず振り向いて、私は彼女を睨みつける。

彼女は、ツクヨミは、手のひらを空中に停滞させ、肩を小さく震わせていた。

「ごめん」彼女は言つた。瞼を伏せたままで。
「良いのよ。寧ろ、お礼を言いたいとこりひね。ありがとうツクヨミ、
あなたのおかげで戻ることができたわ」

「最近……」瞼を伏せたままでツクヨミは言つた。「スクナはおかしい。最近、多いよ。このままじゃ私、私、スクナがどこかいへ行つてしまいそうで怖い」

「大丈夫。どこへも行かないわ」私は彼女に微笑んで、それからツクヨミの瞼に一回キスをする。「だって、あなたがいるんだもの」ツクヨミはなにも言わなかつた。

私は鼻息を漏らしたあと、鴉がいた木の枝を見る。

「田舎に一度戻るうと思つの」

「どうして？」

「夏休みだから」

「なによう。そのまんまじやない」

振り向くとツクヨミが頬を膨らませて私を睨んでいた。

私は彼女に微笑み返す。

「冗談よ。おぼろげだけれど、色々思い出してきたわ

「なにを？」

「三本脚の鴉」

「鴉？ 三本脚？ 意味がわからないけれど……」

「言つたでしよう？ 空に浮かんでいる私の思い出。私はあれを返してあげないといけない」

そう。黒点は太陽に戻るべきだ。

いつまでも太陽から零れ落ちたままではつまらない。

私はまた木の枝に視線を戻した。

枝に留まっていた鴉はもういない。

きっと、先に行つて待つているのだろう。

通路を歩いていた。

質量を受け止める度に、その木製の通路は静かに撓んでいた。ぎしきし、という小さな音が空気に震えて鼓膜に伝播している。気にはなるが、けれど不快にはならない程度のささやかな周波数。それ以外に聴こえるのは小さな呼吸と衣擦れの音だけ、あとはなにも聞こえてはこない。

ふと、立ち止まり、耳を澄ました。それから通路の左側にある庭園を眺める。

地上を覆っている落ち葉が、ときどき空へ逃げよつとして蠢いていたけれどそこから音が集まることはなかつた。素足のまま庭園に這入り空を眺める。空は蜜柑をすり潰したみたいな薄い黄色で輝いている。遙か上空に鳥たちが滑空しているのを視認した。勿論、羽ばたいている音は私には届かない。だけど、鳥たちは鳴ぐのを諦めてしまつたのだろうか？ まるで折り紙で作られたかのように、鳥たちは無機質に空を羽ばたいている。

空を見るのを止めて、その場に屈み込む。それから石畳に手を当ててその感触を確かめてみた。

猫の舌みたいなざらざらとした感じが好きだったの。

ふと、そんな言葉が脳裏を過ぎる。

思わず後ろを振り返った。

そこには誰もいなかつた。空色が透過している障子にぼんやりと影が射しているだけ。とても小さな。

ああ、そうか……。

物音。

立ち上がりつて辺りを見回す。

息を殺しながら石畳の上を歩く。

世界から音が途切れ。

音は死んで。

時間が止まり。

暗闇に包まれ。

時間に同化し。

暗闇に乖離されて。

気がつくと辺りは竹林。

空は見えない。

あそこに這入るのは、怖くて厭だつたの。

でも、会えなくなるのはもつと怖くて……、厭だつたから……。

また声だ。

一体、誰の声？

きっと大人にはできないよ。

今度は、男の子の声。

一体、誰の声？

一体……。

次第に辺りが開けてきた。

小さな小屋がそこに建てられていた。

白い壁に重そうな鉄の扉が嵌められている。そこへ近づいて扉に触れる。死んだ細胞みたいに錆が扉から剥がれ落ちる。ふつと息を漏らして、胸元からお守りを取り出す。ああ、笑っているな、と思つた。

お守りの中身を手のひらに落とした。鉄の扉みたいにざらざらとしていた。そのざらざらとした金属を錠前に差し込む。かちり、となにかが外れる音。

ぼどり、となにかが墮ちていく音。

ああ、笑っている、そう思つた。

物音。

慌てて振り返る。

誰の姿も見えなかつた。

だけど、物音はしたまゝ。獣みたいな素早さで小屋に近づいてく

るのがわかる。

後ろを振り返つたまま、扉に手をかけて、思いつきり引つ張る。

扉はびくともしなかった。

いつもそうだ。

この扉は子供には重すぎる。

いつも？

一体それは、誰の記憶？

一体……。

草を踏みしめる音。

ゆつくつと近づく、 気配。

振り返る。

誰もいない。

辺りを見回す。

誰もいなかつた。

悪い娘。

女の人の声がした。

聞き覚えのある声だ。

でも、誰の声かは良く思い出せなかつた。

ふと、首筋に違和感。

それから、圧力。

短い息が漏れた。

笛を吹いたみたいな高い周波数。

圧力がさらに強まる。

白い指が小さく震えていたのがわかつた。

お母様、お母様、お許し下さい。

また声がした。

この声は良く知つていて。

きっと、私の声だ。

小さかつた頃の私の。

ママに首を絞められた私の。

田蓋をそつと開く。

首筋をくすぐるような感覚はまだ消えていない。

厭な夢を見たような気がするけれど、ぼんやりとした視界が次第に鮮明になるにつれ、その夢は霧に隠されたように霞んでいく。私は夢を思い出すことを諦め、さらに夢を見たことを忘れようとしていた。車窓に反射する自分の首をおもむろに眺める。暗闇に浮かぶ首筋は綺麗なまま。首に残っていた感覚も綺麗に消えていた。姿勢を正してシートに座り直す。と、両膝に違和感。見てみると、黒い髪が私の膝の上を覆っていた。ふつと息を漏らして、髪の隙間に指を滑らせる。指は吸い込まれるように中へと這入つていった。彼女の質量を確かめるように、私はその長い黒髪を三回梳く。それから、髪から覗いた白い肌に指を当てて、彼女の唇に指を停滞させる。彼女はとても柔らかい。私に触れているときも彼女もそう感じてくれるのだろうか、と自己分析。そんなことを考えていたら、なんだか急に笑えてきた。同時に、確かに現実にいるなと再認識。夢のことはもうすっかり忘れていた。

唇に当てていた指が新しい体温を認識する。

私はその体温から指を離して、その指で彼女の唇を濡らせた。

「綺麗な髪ね」ツクヨミから視線を外して、私は囁いた。「柔らかくて綺麗な髪、羨ましいわ」

「スクナも伸ばしてみたら?」膝の上から、ツクヨミの質量が消失する。「似合うと思うよ」

「まあ、その内にね」私は曖昧に応える。

「似合うと思うナビだなー」シートに座り直して、ツクヨミは微笑んだ。

「ぐつすり眠つていたみたいね……、涎が出ていたわよ」

「え、涎? ビニッ! ?」

「冗談よ」

「なんだ」

「指に少し付いただけ。ツクヨミの唇に返しておいたわ」

「ホントにい？」私を一瞬だけ睨んでから、ツクヨミは指で唇を撫でる。「ん、なんかちょっと湿つてるな。ねえ、これ涎なの？ ホントに涎なの？」

「さあ、私は微笑んだ。

唇を尖らせて、ツクヨミはハンカチで唇を拭う。それから欠伸をしたあと、車窓へ身体を向ける。

黒一色だった風景が淡いパノラマに変わっていた。フレームに反射する光に思わず目を細める。自然に散らばる三原色のせいで光が虹色になる錯覚を覚える。澄ましたモデルみたいに立っている無精な灰色はそこにはない。帰ってきたのだな、と思った。畦道に子供たちが現れそして消えていく。フレームの向こう側では彼らはもう大人になっているのだろう。そう、私は過去へ遡行しているのだ。

「なにもないね」

「まあ、田舎だから、ツクヨミの感想に私は苦笑を浮かべる。「後悔している？」

「え？ なにに？」目を大きく開いて、ツクヨミは訊ねた。

「わからないなら良いわ」首を竦めてツクヨミに応える。「ツクヨミのそういうところ、私は好きよ」

「好き、で誤魔化されてもなー」シートに身体を深く預けて、ツクヨミは嘆息する。「まあ、結局はそれで誤魔化されてしまうわけなんだけれども」

「実直だわ」

「単純つてこと？」

「褒めてるのよ？」

「ホントにい？」

「素直なツクヨミが好きだわ」

「また誤魔化して……。まあ良いけれど。うん、私も好きだよスク

ナのこと」

ツクミは薄く微笑んだあと、微笑んだ形を保ったままの唇を私の唇に押し付ける。長いキスのあと短いキスを一回した。

キスをしたあと、ツクヨミは対面するシートに座り直した。頬杖をついて窓の方に顔を傾けている。だけど、生まれたての赤ん坊みたいに、外に興味を覚えたのではないのは確か。彼女は、熱が残留した横顔だけをこちらに見せて、ときどき私を一瞥していたからだ。唇は薄く開かれたまま、小さく呼吸を繰り返しながら、言葉に還元できないものを吐き出している。だから、そんな彼女のために、私は微笑むことで彼女に返していた。つまり、彼女に貰つたものを私は返しているわけだ。

初めはお互いに気持ちを言葉に還元していたけれど、そうやつて言葉を繰り返す内に、それは擦れ合いながらやがて緩慢に霧散してまう。最後に残つたのは、気持ちを信号に変換するくらい。彼女と出会つたときと相対的に比べてみれば、それは明らかな損失だろう。だけど、その分ツクヨミとの距離は近くなつた気がする。フィジカルにしろメンタルにしろそれは変わらない。私には彼女の言いたいことがわかるし、彼女も私のことを理解している。確かにないけれど。少なくともそう思い込むことができる。だから、この損失はきっと素敵なものかもしれない。

アナウンスが車内に響いて、それから電車が減速を始めた。私はツクヨミを観察するのを止めて、彼女と同じように外を眺めた。

木製の電柱が蝸牛みたいにのろのろと後ろに流されている。ケーブルが微かに振動しているのが見えた。だけど、羽を休めている鳥たちは見当たらない。きっと、風に煽られているのだろう。視点を上方へと移動。そこは嫌味なくらい太陽が貼りついていて、きれぎれの雲がテーブルに載せられているオードブルみたいにささやかに浮かんでいる。その他にはなにもなかつた。夢でこんなことをしたことがあるな、と瞬間そんな思考が頭を過ぎつたけれど、直ぐにそ

れを遮断して視点を地上へ下ろす。

鴉はいなかつた。

やはり先に飛んでいて、私のことを待っているに違いない。だから、今日までの私は大人しい。

でも、ときどき空を見上げる癖は直らない。

気がつくとツクヨミが私を見据えていた。微かに唇を開けて、小さく唇を震わせながら上目遣いで私の様子を窺っている。

「鴉は見えなかつたわ。だから心配しないで」久しぶりに言葉に還元してみようと思った。「私は大丈夫よ。ありがとうツクヨミ、心配してくれて」

「恋人だから当然でしょ？」ツクヨミは唇を尖らせて、訊き返してきた。恋人というフレーズも随分と久しぶりだ。新鮮な響きに聞こえたのが、少しだけ可笑しかつた。

私は無言で頷くことで彼女に応えた。ツクヨミは短く嘆息して、シートに身体を埋める。

のんびりと流れていた景色がやがて停滞する。アナウンスが駅の名前を繰り返していた。私はシートから立ち上がり、ツクヨミに降りるように促す。少しだけ不満を伴つたそんな表情。それを笑顔で諫めてから彼女に背中を見せる。

ホームには殆ど人影が見当たらなかつた。

ベンチに一人。老人と少女が間隔を空けて座つている。窓口には籠を背負つた老婆が駅員と話しているのが見えた。

「もう少しだけ乗つっていたかつたなー」

「仕方ないわよ。ここが目的地だもの」肩を竦めてから、私は腕時計を見る。時間は正確。しかし目的の人物はそこでは見当たらなかつた。

「どうしたの？」腕時計を覗き込んでツクヨミは言った。「早く行

こつよ」

「迎えが来るはずなの。もう少しだけここで待つていてるわ」

「お迎えー？」ツクヨミが突然、くすくすと笑い声を漏らす。「ね

えねえ、一体どこのお姫様なの？」

私は首を竦めて、空いているベンチへ歩を進めた。それから荷物を降ろしてそこへ座る。笑顔を保持したままのツクヨミが駆け寄ってきた。魔女みたいな不思議な笑顔だと思った。彼女が変な想像をしているのは明らかだった。

しばらく私たちはベンチで待った。その間、人の出入りは皆無だつた。私は腕時計を再度確認し、バッグから携帯電話を取り出す。目的の名前を検索してからパネルを操作。コールする音が響いた。三回。

「お祖父様なら、来ないよ」ふと、左耳から小さな声が聞こえた。携帯電話を耳に当てたまま、私はその方角を振り返る。

そして、私は彼女と出会つたのだった。

「私は、サワメだよ。お祖父様の代わりに、私が迎えに来ました。スクナ、お姫様だよね？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1456f/>

深層心理パラディソ

2010年10月28日05時09分発行